

修士論文概要

上古漢語における文字表記の諸相

—— 戦国出土資料を中心に ——

宮 内 駿

1. 本研究の概要

本論文の目的は楚地域の文字遣いの特徴を追究することにある。その一例として、第2章「門」声字、第3章「民」と中古重紐、第4章「文」を表す楚文字について検討をしている。

論の前提として、本論文における「上古漢語 (Old Chinese)」の位置を明確にしておく。藤堂1967に従えば、「東周～春秋戦国～秦漢～三国 (前7C～後4C)」であるというが、この時代区分では時間的な幅が広すぎる。そのため、本論文では特に戦国～秦漢に絞って論を進めている。但し、漢語の連続性を鑑みると、戦国期の文字は多分にそれ以前の文字 (甲骨文、金文) の影響を受けているため、これらについても適宜参照している。

第2章から第4章に至るまで、具体的な楚の文字表記について論じている。以下、章ごとにその概要を記す。各章が内容的に独立しているため、各章の結論を以て本論文の結論としたい。

2. 「門」を声符とする文字について

本章は『説文解字』所収の「从〇門聲」の形式を持つ字 (以下「門声字」と呼ぶ) がどの時期に発生したかを検討している。大西2015は、楚系文字では「問」は「昏」 (や左右逆のもの) で表記するのが一般的であり、「問」はないと述べている。では、門声字はどの時期に出現するのか。『説文解字』所収の門声字は計7字あるが、本論文では伝世文献・出土資料ともに用例が豊富な「問」と「聞」を中心に検討している。まず甲骨・金文であるが、「問」はいずれにも用いられていない。甲骨・金文ともに「口」と「門」を構成要素に持つ字が出現するもの、いずれも人名を表すと考えられる。他にも「門」を構成要素に持つ字が出現するものの、いずれも字義不明か地名用字である。従って「門」を声符とすると断言できる文字が見られない。一方、後世の「聞」に相当する、「きく」を表す字は甲骨より出現するものの、全て耳と跪く人の姿をかたどった象形文字であり、門声字としては出現しない。

後世の「聞」「問」を表す字が、同じ声符を持つ字として出現する最初の例は楚簡である。しかし楚簡では「聞」「問」とともに、「昏」を構成要素に持つ字として、字形上の区別なく出現する。その形態は「昏」やそれを左右逆にしたものなどがあり、ものによっては「昏」だけでこれらの意味を示す場合もある。

では「門」を構成要素とする「聞」「問」はいつ発生したのか。Baxter-Sagart2014によれば、「門」を構成要素に持つ「問」「聞」字の初出は睡虎地秦簡である。全編を通して「聞」「問」がそれぞれ「門」を構成要素に持つ字形で出現する。反対に、楚簡に見られた「昏」を構成要素に持つ字は出現しない。

上述のように、楚簡において「聞」は昏声で表されてきたが、睡虎地秦簡で門声に交代した。その理由を音韻的に検討していく。中古音で、声母が「昏」は曉母 (x-) と「門」は明母 (m-) で異なってい

るが、このような諧声関係は「海／毎」「黒／墨」「荒／亡」と同様であるため可能であるといえる。Baxter-Sagart2014は、無声鼻音 *m̥- を想定して再構している。

また漢以降の状況としては、前漢初の馬王堆帛書『周易』では、伝世文献で「昏」で書かれる部分が「聞」で書かれている。他にも同『老子甲本』に「悶」（「悶」の異体字）で「昏」を表す例も見られる。また同じく前漢の銀雀山漢簡では、「聞」と「問」の字形を明確に分けている。これらの例から鑑みるに、前漢では「門」が声符となることが定着しつつある段階であると言えるだろう。同時に、この段階では依然として門声と昏声が通假することから、中古曉母になる *m̥- が前漢まで鼻音要素を保っていた可能性が高い。

戦国出土資料では「昏」が「聞く」「問う」の両方を表していたが、睡虎地秦簡（BC200年頃）では字形が「聞」「問」に分化した。その原因と考えられるのは隷変である。陸錫興2006によれば、隷変は少なくとも戦国晩期に始まり、前漢にピークに達したという。隷変により、文脈依存であった「昏」が整理され、「耳」「口」を構成要素とする字として現れるようになったのではないだろうか。

3. 民声字と中古重紐

本章では「民」を声符とする字（以下、民声字と呼ぶ）が、中古真韻において重紐三等（B類）と重紐四等（A類）に両属する原因を追究している。一般的に中古真韻の重紐三等は文部由来が多く、重紐四等は真部由来が多い。従って民声字は全て重紐四等に配されるべきである。しかし実際には三等（珉...）と四等（民...）に分かれて配される。この混乱にはおそらく「昏」を声符とする字が影響していると考えられる。「昏」は文部に属していたが、ある時期から「昏」が異体字「昏」を介して「民」と通用するようになった結果であろう。この仮説について検討した。なおその方法は、重紐三等に配される民声字を逐一検証するというものである。

なお本章は「民」と「昏」が上古において全く異なる来源を持つという推論が成り立った上で初めて成立するものである。果たして「昏」と「民」の関係は如何なるものか。以下、甲骨・金文・戦国出土資料を用いて通時的に見ていきたい。まず「昏」は甲骨より見られる。甲骨では、原義の「黄昏」を示す。当該字は朝を表す「旦」と対比的に用いられることが多い。

【例】「郭（郭沫若は「章」に作る）兮至昏不雨。」（郭沫若『殷契粹編』粹715）

なお当該字について、郭沫若は「昏」字の段注を引用した上で、「知殷人昏字實不从民，足証段氏之卓識，而解決千載下之疑案矣。」と述べ、「昏」は民声ではないと見なしている。

一方「民」は甲骨より出現し、尖った刃物で目を傷つけることの象形である。

甲骨：（乙118／合20231） 金文：（趯尊／西周早期／集成6014）


金文においても甲骨の形状を継承している。従って甲骨・金文の段階では両者が混同されることはあり得ないと思われる。次に楚簡であるが、「民」の字形にはバリエーションが存在するものの、この段階でも「昏」（の上部）と形状が混乱することはないと言える。

秦簡ではじめて「昏」を「昏」に作るようになる。また呉振武1991、黄文杰1998、郭永秉2008などが指摘するように、秦漢では「氏」と「民」がほぼ同形に書かれるようである。ここに「昏」を民に従う字と誤解した原因があったのではないだろうか。

民：『睡虎地秦簡』語書／昏：『睡虎地秦簡』日書乙 『閔沮』

また馬王堆帛書『老子』でも秦簡と同様に、{昏}を「昏」に作っている。なお漢の石經でも{昏}は「民」＋「日」に作られる傾向が強い。羅常培・周祖謨1958によれば、字形の面だけではなく、漢代には真部と文部が合流していたという。従って「昏」の上部にある「民」が声符として再解釈された可能性が高い。結論としては、民声字が、重紐A類B類にまたがって出現する原因は、「昏」が介在しているとみて問題ないと思われる。また秦で「民」と「氏」の字形が混同することで「昏」という字形が生み出され、更に真文部が合流したことで、字形だけの混乱ではなくなったようである。

4. {文}を表す楚文字について

本章では楚簡において{文}を表す字（一般に「𠂔」等と隸定される。以下「当該字」と呼ぶ。）について再検討を加えた。当該字は、李天虹2002や李學勤2001、陳劍2004等の研究により、民声或いは民の省声に従うと考えるのが定説になりつつある。明母真部の「民」と明母文部の「文」の通仮を考えているのである。しかし上古音研究一般において、部が異なる字の通仮は例外的である。そこで当該字の研究史を整理した上で、民声以外の解釈が出来ないかを検討した。本論文における結論は、楚簡中に出現する当該字は「𠂔」と隸定し、「従目敗声」の字であるとする。「敗」はその字の構成要素から従来は民声とされてきたが、実際には「閔」との関連が深いので、文部所屬字であると考え、従って明母文部の「敗」を声符とする「𠂔」が同じく明母文部の{文}を表すと考え、

参考文献（概要で言及したものに限る）

- 藤堂1967：藤堂明保「上古漢語の音韻」（『中国文化叢書 1 言語』所収、大修館書店／1967年）
 大西2015：大西克也『「非發掘簡」を扱うために』（出土資料と漢字文化研究會編『出土文獻と秦楚文化』第8號／2015年）
 羅常培・周祖謨1958：羅常培，周祖謨合著《漢魏晉南北朝韻部演變研究》，科學出版社，1958年
 吳振武1991：《釋戰國“可以正民”成語》，《湖南博物館文集》，岳麓書社，1991年
 陸錫興2006：〈論隸變研究的新進展〉，中國文字學會《中國文字學報》編輯部《中國文字學報》第一輯，2006年
 黃文杰1998：《氏民辨》，《容庚先生百年誕辰紀念文集》，廣東人民出版社，1998年
 中心《出土文獻與古文字研究》（第二輯），復旦大學出版社2008年
 李天虹2002：李天虹〈釋楚簡文字“𠂔”〉，饒宗頤主編：《華學》（第四輯），紫禁城出版社，2000年。（同《郭店竹簡〈性自命出〉研究》，湖北教育出版社，2002年再録。なお本論文では再録版を参考とした。）
 李學勤2001：李學勤〈試解郭店簡讀“文”之字〉，《孔子・儒學研究文叢》（一），齊魯書社，2001年（李學勤《中國古代文明研究》，華東師範大學出版社，2005年再録）
 郭沫若《殷契粹編》（《郭沫若全集・考古編》第3卷，科學出版社，2002年）
 陳劍2004：〈甲骨文金文舊釋“尤”之字及相關諸字新釋〉，北京大學古文獻研究中心集刊（第四輯），北京大學出版社，2004年（陳劍《甲骨文金文考釋論集》，綏裝書局，2007年再録）
 郭永秉2008：〈馬王堆漢墓帛書《春秋事語》補釋三則〉，復旦大學出土文獻與古文字研究中心《出土文獻與古文字研究》（第二輯），復旦大學出版社2008年
 Baxter-Sagart2014: *Old Chinese A New Reconstruction*, Oxford University Press, 2014